The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	源氏物語における親族の呼び名
Author(s)	神谷, かをる
Citation	語文. 1974, 32, p. 43-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68622
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

源氏物語における親族の呼び名

神谷かをる

一、はじめに
二、親族名称
三、対人呼称
四、親子関係
五、おわりに

一、はじめに

源氏物語の登場人物については、『源氏物語事典』所収の、「系図・人物呼称一覧」などによって、整理がなされているし、古くから名寄せの類もある。論としては、玉上琢弥先生の「源氏物語作中人物呼び名の論」（『源氏物語研究』所収）もあり、事実と方法とを、文学的に論じておられる。又、森野宗明氏は、「古代の敬語Ⅱ」（『講座国語史』五）において、人物呼称を、「待遇表現の重要な一翼をになう領域」として、調査考察を始めておられる。

親族内や、それ以外の種々の人間関係において、誰が誰を、どんな場合にどう呼ぶかという研究は、日本語に関しても、鈴木孝夫氏が、興味ある見解を提示しておられる（岩波講座『哲学』の言語編「言語と社会」。岩波新書『ことばと文化』など）。それは、現代語において、始まったばかりで、古代語の研究は少ない。残された資料に限りがあり、しかも、ある家族なら家族の成員が、互にどう呼んでいたかということがわかるような場面が描かれていることが少いからである。さらに、例えば、ここに取り扱う源氏物語の場合でも、地の文と心話文と会話文とが明瞭でなく（それが物語の特徴でもあろう）、「対人呼称」を考える場合の、当然、会話文を中心にしか考えにくい問題を、どう処理するかという困難が伴う。しかし、それにもかかわらず、源氏物語には多くの登場人物があり、種々の呼び名が使われていることに注目せざるを得ない。そしてそれは、当時の婚姻制度、家族制度・社会制度などと関連してゆく面があって、言語を超えた世界にぶつかる。しかし、逆に、言語からそれらの垣間見も出来はするのである。さらに、敬語との関係からも、とらえにくい面が多いが、いずれは、待遇表現との関連あるいはその中での位置づけが明確にされるべきことであろう。

このように、さまざまな意味で、試行錯誤の一つとなるかもしれないが、手のつけられるところから、少しづつ解きほぐしてゆくことを試みるのも、あながち無意味ではないであろう。

なお、「対人呼称」というのは、宮地裕先生の仮の用語で、「呼称」

は「名称」に対する語として用いられる（明治書院・敬語講座第二巻『上代中古の敬語』の「源氏物語・枕草子の敬語」）。「呼び名」という場合は、登場人物が、登場人物や作者（時には読者）から、どう呼ばれ、名づけられているかという点から用いる。

二、親族名称

㈠、源氏物語における親族名称、および親族語彙としては、次のようなものが見出される。（注1）

親・子（御こ・むすめ等）、親子・女親・父・母・祖父・祖母・孫・叔父・叔母・兄・姉・いも・いもうと・おとうと・このかみ・せうと・甥・姪・妻・北の方・后・父方・母方

これらは、父母子の他、主として、血族関係の、祖父母と兄弟姉妹と孫（現代法律用語でいう二親等）、叔父叔母甥姪（三親等）から成っている。それ以外は、

。この人は、かの大納言の御乳母子にて、父はこの姫君たちの母北の方の母方の叔父、左中弁にて失せけるが子なりけり（椎本）

のように、右に挙げた語彙を用いながら、関係の説明をしている。源氏物語には、このような人物の系図説明は幾つかある。どんな場合に、誰を中心に描かれているかを探ることも興味あるが今後に残す。

親族語彙のうち「いとこ」は、常夏の巻に一本のみ例があるが、他に用例がない。「いとこ」そのものは、例えば、

。弁→薫「（浮舟の）母君は、故北の方の御姪なり。弁も離れぬ中らひに侍るべきを……」（宿木）

のように、「離れぬ中らひ」としてとらえたりしている。親族のうち、どの辺までをどのような「ゆかり」としてとらえているかも、興味ある問題である。むろん、それぞれの場合によるだろうが、。うしろ見と頼ませ給ふべきをぢなどやうのはかばかしき人もなし（宿木）のように、後見人が叔父にも及ぶことなどがわかる。

右に挙げた親族語彙の中、「親・子・妻・北の方・后」以外については、源氏物語の全用例を調べた。現代語と比べ特徴のある語についていうと、次のようになる。（用例は一例のみ示した）

〈弟〉（おとうと）

男からみて

弟（中将の弟禅師の君　手習）
異母弟（東宮の弟光源氏　賢木）

女からみて

妹（麗景殿女御と妹の三の君　花散里）
異母妹（浮舟と中君　蜻蛉）

〈妹〉（いもうと）（注2）

男からみて

妹（頭中将と葵上　葵）
女きょうだい（式部丞の妹ども。年下か。　帚木）
年下の女きょうだい（豊後介と妹たち　玉鬘）
男児の姉（小君と空蟬　帚木・空蟬）
男児の異父姉（小君と浮舟　夢浮橋）

〈このかみ〉「人」をさすよりも「年上」の意であろう。

長男（玉鬘の長男・左近中将・下には男も女もいる。　竹河）
長女（大君。下には中君など　総角）

男からみて

年上妻（源氏と葵上　紅葉賀）
年上男（柏木と夕霧　柏木）
兄（三の宮と二の宮　横笛）
女からみて
姉（女五宮の姉　朝顔）
兄（女一の宮と匂宮　蜻蛉）
〈せうと〉
女からみて
兄（藤壺と兵部卿宮　桐壺）
男きょうだい（真木柱の兄弟。太郎君・次郎君。　若菜下）
異母兄（玉鬘と柏木　真木柱）
異父弟（若君と宮の君　紅梅）
〈兄（あに）〉
男からみて兄（惟光の兄阿闍梨　夕顔）
〈姉（あね）〉
女からみて
姉（兵部の君と姉　玉鬘）
異母姉（紫上と式部卿宮の大君　藤袴）
男児からみて姉（小君の姉空蟬　空蟬）
〈はらから〉（男、女のどちらから見たか決めにくい）
男からみて
弟（豊後介と弟　玉鬘）
兄弟（源氏と兄弟の螢兵部卿宮たち　幻）
姉妹（朱雀院と斎院などの宮々　濡標）
女からみて
兄（雲井雁と兄左衛門督・藤宰相　宿木）
兄弟（中君と兄弟　宿木）
姉妹（夕顔らの姉妹　夕顔）
妹（未摘花の母北の方の妹　蓬生）
異母兄（玉鬘と夕顔　野分）
異母姉（浮舟と中君　手習）
異父弟（浮舟と小君　夢浮橋）
異父兄弟（浮舟と兄弟、常陸介実子。　浮舟）

対人関係の用語としてみたこれらの語彙の考察もさることながら、呼称的に使われたかどうかという問題がある。現代語で、「兄さん」といえて「弟さん」といえない事実など、用例からはつかめない。そして、右の語群のほとんどは、単なる親族名称とみなす方がよさそうである。

(二) 源氏物語において、人物の呼び名を調べてみると、実名、官職名・僧職名・召名などがあり、子の順序から「太郎君・次郎君」や「一の宮・二の宮」「大君・中君」などの言い方もある。その他、「一(の)殿・君・上・方・宮」などがある。男は「ある程度昇進すると実名よりも官名を用いる。君達はその時々の官職名で呼んでゆく」のである。姫君は、「式部卿の宮の御大君などという。ところが結婚して北の方となる。その時々の呼び方をする」のは男と同じである（玉上先生前記論文）。官職名でとらえることは、種類も頻度も、男より女の方が少いような気がする。いずれにしても、女は、「女（をんな）・姫（君・宮）・母（君・上）・祖母・母親・女親・叔母・姉・妹・弟・北の方・妻・子」というように・誰か（男である場合が多いか）の母や娘というような、親族関係でとらえられることが少く

ないようである。「誰々の北の方」「誰々の母」という呼び名でしか登場していない人もある(髭黒の初の北の方など)。女は、このように、親族(その中でも特に親子間、ある子の母、ある男の娘や妻)としてとらえられやすい。即ち、他者によって、他者との親族的関係によって、自己の名が決まるといってよいだろう。男も女も、それぞれの時期と位置に応じて、男は、官職的自己名称規定をし、女は、親族的自己名称規定をする傾向があるといえよう。

三、対人呼称

源氏物語には、親子兄姉など以外に、夫婦・恋人・友人・主従等々、実にいろいろな種類の関係があり、互に複雑にからんでいることも少くない。その中で、やはり、親族関係から焦点を当ててみたい。そして、特に、親子関係を中心に眺めたく思う。源氏物語を読んでいて、婚姻関係よりも、同一の直系血族意識の方が、親族意識が強そうに思える。例えば、自分の娘を入内させることは、后になることよりも、その子が新帝となって、自分が血族になることを最終的には望んだのであろう。入内に限らず、女は、誰かよき夫の子を生み、母となることによって、夫との愛をつなぐよすがの一つとしただろうし、女の親兄弟は、それを出世の糸口と考えたろう。(注3) また、当時は、夫婦が同居しないで、女は親と同居している場合が多いし、一夫一婦でもないから、一人の男に幾人かの異腹の子があった場合、何かのきっかけがなければ、互にきょうだい意識はうすかったであろう。即ち、婚姻関係で相互に連なるというヨコの関係よりも、親子・祖父母孫というタテの関係の方が重要視されたと思われる。そこで、本稿では、親子関係を中心にみてゆく。

源氏物語に登場する人物で、何らかの名を与えられている場合、実名以外は大体、作者がつけたものであろう。親子関係でみると、「父・母・女・子」など使っているのは、その話手や作者(時には物語の語り手)が、その人をその関係でとらえていることになる。作者を中心に置くと、それは文体の問題にも入ってゆくだろう。ここで、やはり、会話文中心に考えざるをえない。そこには、話手・聞手・第三者が登場する。話手のことを表現する語を自称、聞手のことを表現する語を対称、第三者のことを表現する語を他称と一応考えることにしておく。これまでの呼称の研究は、自称・対称が中心で、他称は取りあげられていない。むろん、事実上は、取り上げざるを得ぬ場合があって、例えば、鈴木氏は、自分の娘を「ママ」と呼んで孫と話す祖母の例を挙げたりされるが、その「ママ」などは他称に入るものだろう。森岡健二氏は、他称を「第三者に与える名称のことで、その用法は普通の名詞とほとんど変らないと思われるので、特に対人関係用語に含める必要はなさそうである」としておられる(敬語講座七『行動の中の敬語』の「敬語と教育」)。確かに、呼称は名称と区別さるべきで、呼称というなら、やはり、誰かに直接そう呼ばれる、又は、その人を指すのが、用語の意味としては正当だろう(よばれることと指すこととは別ではある。鈴木氏は、vocative と pronominal の二つを分けておられる。慶応大学言語文化研究所紀要第一号「親族名称による英語の自己表現と呼称」)。話手と聞手とのことなら、呼称ということが明確になりやすい。しかしそれとても、人称代名詞がその中心的役割だといえない日本語では、呼称と名称との境界線がひきにくい面があり、古典語ではなおさらそうである。さらに、第三者が入ってきた場合、いよいよ困

る。第三者は全て名称だといってよいことすらあるだろう。さし当って、本稿の場合、話手と聞手との間に、親子関係があるか、第三者との間に親子関係があるかする場合に限定すると、他称としてとらえやすい面も出るのではないかと思う。それを他称といってよいか否かは別として、そこに限定して考えてみたい。

自称と対称（注4）

親子（……以後は祖父母と孫）	自称	対称	巻名
兵部卿宮→若紫	おのれ	君	若紫
帝→源氏		そこ・皇子たち	紅葉賀
右大臣→朧月夜			賢木
故院→源氏	われ	君	明石
入道→明石上			松風
頭中将→大宮	みづから		乙女
大宮→頭中将		そこに・おとど	〃
惟光→息子ら	ここに・われ	きんぢら	〃
乳母女→乳母			玉鬘
玉鬘→夕顔	まろ	わが親（呼びかけ）	〃
源氏→夕霧	われ	朝臣や　〃	常夏
頭中将→近江君		御身	〃
源氏→夕霧	親	中将	野分
頭中将→近江君	おのれ・ここに	この近江の君（呼）	行幸
源氏→夕霧	われ・ここに・おのが		藤袴
髭黒北の方→子	みづから・おのれ	姫君・男君達	真木柱
髭黒→息子		あこ	〃
頭中将→柏木	翁	朝臣や（呼）	藤裏葉
入道→明石上	みづから	わが君・わがおもと	若菜上
尼→明石上		君	〃
明石上→明石女御	ここに		〃
源氏　→　〃	ここに	大将（呼）	若菜下
源氏→夕霧	おのれ		夕霧
一条御息所→女二	ここに		〃
朱省院→女二	みづから	そこに	幻
源氏→夕霧	なにがしら		竹河
頭中将→玉鬘			
若紫→尼		うへこそ（呼）	若紫
大宮→雲井雁	まろ	君	乙女
大宮→夕霧		生ひさき遠き人	〃
紫上→匂宮	まろ	「はは」又は「ばば」	御法
匂宮→紫上	まろ		〃
匂宮→源氏		君	幻
源氏→匂宮			〃

幼児から親や祖父母に対しての自称は、「まろ」がよく使われるようだ。子から親への用例は少く（頭中将→大宮、乳母女→乳母、玉鬘→夕顔）、それも自称か、対称ならば呼びかけ以外はあまり使わない傾向があるかもしれない。親から子に対しては、自称「ここに・みづから・われ・おの(れ)」がよく使われるようだ。対称は、「君・そこに」等の他、「おとど・朝臣」のように、官名系もある（自称と対称については、前記「源氏物語・枕草子の敬語」において、筆者の調査を挙げておいた。それとの関連で、いずれ再考したい）。親子関係を示す語としては、「わが親・あ子・はは」である（「わが親」

という呼びかけは、行方不明の母に向ってであって、特殊ないい方かもしれない)。一般に、自称には、官職名も役職名も親族名も用いないらしい(親族名の「親」の例が一つ、頭中将→近江君にあるが、自分を含めて親一般をさすと思われる。そういう使い方なら、他にも用例があるだろう)。次に、他人に、わが親か子、祖父母か孫について述べた表現をみてみる。

帝→弘徽殿女御　春宮(わが子)　紅葉賀
源氏→女房ら　幼き人(わが子)　葵
頭中将→源氏　おとど(わが父)　須磨
夕霧→明石姫の乳母　宮(わが祖母)　野分
大宮→源氏　この中将(わが孫・夕霧)　行幸

この用例を集めると形の上から次のように整理できる(心話も入れた。又、男と女とで用法が異るが、今は一緒にした)。

親系(親・女親)父母系(父―・母―)子系(子ども・御こ・むすめ・女子・女御子・子)宮(若宮・宮・大宮・故宮・兵部卿宮・三の宮・男宮・姫宮・女二の宮)君(君・姫君・大将の君・源氏の君・君達・若君・おとどの君・女御の君)官名(院・帝王・東宮・大将・中将・内・大臣・衛門督・中納言・斎院・女御・内親王・侍従)うへ(院の上・故院の上・故上・内の上・うへ)との(この殿・殿)人(幼き人・かの人・この人・かかる人・その人・人・なき人)まま(侍従→末摘花、侍従のわが母故乳母をいう。蓬生)これ(入道→源氏、わが娘明石上をさす。明石。尼→明石上、わが孫明石姫君をさす。薄雲)かれ(院→乳母ら、わが子源氏をさす。若菜上)

このうち、他称として人称代名詞的なのは、「これ」「かれ」であって、他は、話題の第三者として種々の表現がされている。どんな場合にどの系列の語が使われているのか法則めいたものは見出しにくい。誰との関連で、どんな話題に上せられているか等と関連するからであろう。ただ、「父―」「母―」という語が用いられる場合、そこには明らかに、誰かの父・母という意識が働くのであるから、注目に価する。それで、以下、そのことをもう少し詳しくみてみよう。

(注5)

四、親子関係

A、「父―」の用例

「父・父帝・父大臣・父君・父親王・父宮」の語形がある。「母―」系の語に比べ、語形の種類も使用数もはるかに少い。また「父大臣」や「父宮」は、「おとど」「みや」だけでもよかったらしい。特に、自分の父に使うことは三・四例しかなく(本によってもっと少い)しかも心話だけに出てくる。

。乳母→右近「いかさまにして都に率て奉りて、父大臣に知らせ奉らむ。」(玉鬘。玉鬘の父内大臣のこと)

。(源氏)「夢のうちにも父帝の御教へありつれば、又何事をか疑はむ」と思して(明石。源氏の父)

B、わが父

いろいろな語が用いられているが、「大臣」「院」など官名系が多いようだ。「父―」系は、Aに述べたように少い。父としてのとらえ方をあまりしなかった、ということはそう簡単にはいえまいが、少くとも用語の上ではそうである。父と子の心情は、物語中いくつか描かれているのに、語が少いのである。それは、女中心の世界からみて、父としての役割を、母ほどに期待されなかったということ

かもしれない。「父」としてより「親」という語でとらえられるのかもしれない。(注6)

C、わが母

わが母をさすのに、「母―」系の語を使っているのは「母上・母君・母・母宮」の各一例、

。玉鬘→乳母ら「母の御許へ行くか」(玉鬘)

。(薫)「わが母宮もおとり給ふべき人かは」(蜻蛉)

しかもほとんど心話にある。「母―」系の語形は、「母・母北の方・母君・母上・母宮・母御息所・母后・母女御・母御(おもと)」のごとく、種類も頻度も多いのに、わが母については少い。このことは、これらの語が、自分の母に使うよりも、(現代語感覚からみると誰かの子の立場に立ってそこから母とみるという)位置換えによる用法によく用いられるということかもしれない。なお、「母」という語形は、老女弁や僧都の他に、幼い玉鬘や近江君が使ったりしているし、匂宮の「はは」(又は「ばば」)の例もあるので、呼称的な用法もあったのかと思われる。

以上のように、わが父母に対しては「父―」「母―」の言い方は少い。それを冠せるのは、改まった意識があったのかもしれない。即ち、会話に特に少いところをみると、呼称とは決していえず、単に親子関係を示す語(名称)として用いられているのであろう。会話文では、「宮」などだけで足りたと思われる。そしてその方がむしろ呼称的だったのかもしれない(例えば横笛の巻、地の文で「母宮」、会話文で「宮」)。

D、わが子の母

。帝→弘徽殿女御ら「今は誰も〳〵え憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」(わが子源氏の母・桐壺更衣)

わが子の母、即ちわが妻のことを「母―」の語で述べている例は六例(母君」「母宮」各三例づつ)ほどある。「父―」の例は一例(わが子浮舟の父、営陸介を、「父ぬし」。東屋)のみ。用例数だけからは勿論いえないが、これまでみてきた種々の点からみて、やはり、次のことを考えうる。即ち、女が、自分の夫に対して、わが子の父としての役を願うことが強制すべきでないのに対し(注6)、夫は、わが妻に対して母たる役を認めもし期待もしていることがわかるような気がする。当時、父権は、政治的社会的には母権よりも強かっただろうが、居住形態などからみて、母系家族的なものであり、それがこういう用語にも現われているとみるのは、うがちすぎだろうか。(注3)そして、一例「大将の母君」(源氏→紫上、の会話中に、葵上をさして)という以外は、「誰々の」という語をつけずに用いている。それは、現代語で、自分の妻を「母さん」と子供に話すのと少し似た傾向と思われる。ここで用いられる「母君」「母宮」は、他の「母―」系の語よりも、呼称的な語であったのではないかという気がする。そして、そういうのを、他称とみてよいのかもしれない。

E、あなた(聞手)の父母

。夕霧→姫君「母君の御教へになかなひ給うそ」(あなたの母、雲井雁をさす。夕霧)「あなたの母」に対しては「母―」系の語が多い(九例中五例。他は「宮」「上」など)。「あなたの父」に対しては「父宮」一例のみである(中君→宮の君の会話で、聞手の父式部卿宮をさす。蜻蛉。他は「おとど」など)。「母―」系も、「母君・母上・母宮」の語形だけで、やはり、呼称的・他称的な語と思われる。現代語の「お母さんお元気?」と聞手の立場でその母のことを述べ

るのと似ているだろう。

F、祖父（おほぢ）

地の文にしかない。親族名称にすぎないのだろう。ここで注意しておきたいのは、「おきな」という語である。ただし

頭中将→柏木（自分をさす。藤裏葉）　大納言→宮の姫君（義理の父娘。自分をさす。紅梅）　匂宮→若君（若君の父大納言をさす。紅梅）

のように、「父」代りに自称や他称に使っている。「祖父」という語よりも口頭語性が強いのであろうか。「祖父」にはそんな用例がない。ちなみに、「孫」という語も、地の文の例が多く、現代語の「お孫さんお元気ですか。」というような用例はない。

。頭中将→柏木「剣いたう酔ひ進みて無礼なればまかりぬ」（藤裏葉）

。東宮の御おほぢにて、つひに世の中をしりたまふべき右のおとどの……（桐壺）

。式部卿の宮も、御孫を思して、御鼻の色づくまでしほたれ給ふ、（若菜下）

G、祖母（おば）

。かの御おば北の方、慰む方なくおぼししづみて（亡き更衣の）おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひ給ひ（源氏の祖母。桐壺）

この他、若紫の祖母（若紫）、玉鬘の乳母（祖母として地の人に思わせている。玉鬘）、夕霧の祖母大宮（野分）、若宮の祖母・明石御方（若菜上）に用いられている。そのうち、会話文は一例で

。僧都→源氏「かの祖母に語らひ侍りて聞えさせむ」（若紫）

話題が若紫にある場合、僧都の妹である人を「妹」といわず「祖母」ととらえている。鈴木氏のいうように、最年少者中心に呼称が行われるという現代日本語の傾向は、直ちに源氏物語には認められないが、しかし、呼称に限らないなら、（最）年少者からみた名称の使用は珍しいことではない。このことについては、各家族ごとに再考してみたい。

なお、「祖母」の語には、呼称的用法もあったらしい。

。内侍→源氏「院の上は『祖母おとど』と笑はせ給ひし」（朝顔）

は、歌「年経れどこのちぎりこそ忘られね親の親とかいひし一言」をうけて、老女源典侍をさしている。

。源氏→頭中将「おばおとどの上ないたう軽め給ひそ」（葵）

頭中将や源氏にとっては、祖母に相当する年なのであろう。あだ名のようである。「おとど」という語がついているせいもあろうが、呼称的である。しかも肉親でない老女に使っているのである。

五、おわりに

焦点のしぼれないまゝ、親族・親子関係の語の周辺をうろついた。源氏物語という、ある意味で特異な世界を扱ったものを用いることから、当時の主として上流貴族層の親族用語の用い方をみることは、偏りがあるかもしれない。他の同時代の物語に限らず、種々の作品を広くながめて、せめて、ここで扱ったことからだけでも固めてゆかねばならないだろう。

（注1）源氏物語を読みながら、現代の親族名称や語彙を参考にして拾った。『源氏物語大成索引』によっても同様にした。「女親」があって「男親」がないことなどの考えるべきことは多い。この

他、「ゆかり」「えにし」「一腹」なども関連しそうだ。源氏物語の語彙にくわしくないので、範囲の確定に厳密性はないかもしれない。

（注2）〈妹（いも）〉は、催馬楽などの歌の引用が全てと思われ、恋人・妻の意のようだ。〈妹背（いもせ）〉は、夫婦または兄妹。兄妹説は、原田芳起氏「いもせ語義弁証」（『平安時代文学語彙の研究続編』）

（注3）高群逸枝氏『招婿婚の研究』『日本婚姻史』や、中央公論社『日本の歴史』5、土田直鎮氏「王朝の貴族」などに、当時の貴族の家族と外戚関係などが簡単に述べられている。

（注4）この表には宇治十帖を省く。

（注5）「みこ」は親王、「御子」は「おほんこ」とよんで区別する方がよい（玉上先生「平安時代の敬語」『国文学解釈と鑑賞』昭31年5月号）

（注6）子が両親に育てられるのが理想的だとするのはもちろんである。「親（父）なき人は身もいたづらになるものなり」（『宇津保物語』俊蔭）

（底本は、玉上校注『源氏物語』角川文庫と『源氏物語評釈』によった）

（光華女子大学講師）